

---

# 二次元野郎と・・・

勿論西村

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二次元野郎と・・・

### 【Zコード】

Z0364Z

### 【作者名】

勿論西村

### 【あらすじ】

俺は二次元しか興味ない。

しかしそんな俺がある日先生に呼ばれ  
クラスメイトの不登校になつた富木京子を学校に呼べと言われた  
その理由は前まで俺が不登校だったからだ  
そんな理由で面倒くさい事をする

## 富木ヒロシドナイト

キーンゴーン・・・・・

授業終了チャイムが鳴り響く

そして俺が伏せていた顔を上げると担任の教師と目があつた

「佐藤君、ちょっと来て。」

佐藤君とは俺の事である。

先生に呼ばれるがまま俺は（面倒くさいが）席を立つた

俺が先生の前に立つ。何の説教だ？

「富木さんの事なんだけど。」

小さく先生が言つ。

宮木京子、彼女は俺のクラスメイトで今現在学校には来ていない。  
所謂不登校と言つやつだ。

なんて羨ましいんだ。

「羨ましくありませんよ、」

「人の心の中を読まないでください。」

すると先生がぽかんと言つ顔をして

「口に出してましたよ。」

「んな、 で、富木がどうしたんです？」

俺が本題に戻す、すると先生が顔を曇らせて

「彼女を学校に呼んでほしいのよ」

「無理ですね。」

不登校になると、殆んど復帰するのは無理だ。

「でも、キミは不登校から復帰したでしょ？」

そう、俺も前まで学校を休んでいた。休んでいた！

「俺の場合は不登校ではなく長期休暇です。」

「そんなの同じでしょ！』

違う、俺の場合アニメを見たいがために学校を長期休暇しただけだ。

ちなみに自分で言つのもアレだが、俺は結構もてる。

「貴方の姿なら彼女もおとせるはずよ。」

「先生。俺は一次元にしか興味ありません。」

苦笑いを浮かべる先生だが、「コレは事実だ。  
これまでに数回俺は告白されたがすべてを一次元を理由に断つた  
「とにかく、彼女の家に行つてみてください」  
「は?」

「・・・・・お願い、「

チツあそこまで（土下座）されたら断れねえじゃねえか  
俺はぶつぶつ言いながら、もらつたメモに書いてある住所に向かつた  
ちょっと迷いながらも何とか到着した。

玄関の前でインターフォンを押そうとする、がやめる  
もし出できたらなにを言つんだ?

「学校に来てくれ」・・・・・か?

そんなこと言われて出でてくる奴なんでいないよ。

「キミ、何してるの?」

といきなり背後から声が聞こえ、ビクンッと驚く  
振り向いてみると、20後半から30前半位の女性が立つていた  
両手にはスーパーの袋、買い物帰りとみた

「京子のお友達?」

「あ、いや・・・そ、そうです」

俺は宮木の母親と思われる女性に頭を下げる  
「どうぞ上がってください。」

そう言つと玄関扉を開けて中へ招いてくれた  
玄関口は広く、片付いていた

スリッパを借りて、リビングに案内される。

麦茶を出してくれたのでいただく

宮木の母親が向かいあいの椅子に座り

「京子はね、昔はこんな子じゃなかつたの、」  
富木の事を話してくれた、いや語つてくれた  
どうやら部屋にひきこもつてゐるようだ。

引きこもりだした理由はあるアニメに釘づけになつて出でないよう  
うだ。

「一度、京子さんに会わせてくれませんか?」

「・・・出来る限りの事はするわ」

そのままとコビングを出して階段に向かつた。

部屋のドアには『きょう』と書かれたプレートがある  
コンコンと母親さんがノックする

「京子、お友達が顔を見たいつて・・・」

そう言うが反応が帰つて来ない。

するとしばらくしてガチャッと鍵が開かれる音があるので  
母親がドアを開けようとする

ガツ、ガツ・・・・・

今しめたのか!!!!!!

あの音は聞く音じやなくて閉める音かよ!!!

「京子お願ひ、もう一度開けて、」

母親さんが泣きそつな声で言つ。

相変わらず声はしないが、

何回か鍵がガチャガチャ鳴る。

閉めたり開けたりしてるので?

そしてガチャ音が鳴り終わると

きい〜〜〜と音を立ててドアが開いた。

それを見て母親がしたにおりて行く。

部屋の中はクーラーがきいていてカーテンが閉められ電気が付いて  
いない、唯一の光はパソコンの画面の光。そして、ドアがきい〜  
としまつていく、

バタンッと閉まりきると一気にガチャガチャ……と鍵が閉まる音が何回も連續する。

「なつ！」

俺が振り返ってドアを見ると暗証番号やら、カードキーやらの鍵が何個も付いていた。

「凄いな、俺はここまでしなかつたぞ……」

「貴方誰？」

画面を見ている富木が俺に聞いてくる

「俺か？俺は佐藤康。」

てか俺主人公だよな？今フルネーム出たぞ！？

「何しに来た？」

「話しに来た。……うーん何のアニメ？」

アニメの事を聞かれびくんと反応する

すると富木は画面を見たままアニメの事を話してくれた

「『ミツドナイト』よ。」

「ああ原作：藤島夜先生の三作品田のライトノベルアニメか」  
俺はほぼすべてのアニメを見てる、原作も好きなのは見ている

「知ってるの？」

「いや、コレくらい一般常識だろ？」

その言葉で俺を同志と思ったのか、椅子に乗ったままぐるっと回転して俺の方に向き直る

「アニメ全話見た？」

「勿論1期から今やつてる3期まですべてにおいてリアルタイムで見てる。」

暗い部屋に目が慣れてきた、よく見ると部屋の壁にはミツドナイトのポスターが棚にはフィギュアやキャラグッズ、そして本棚に原作本と同人誌がズラーッと並んでいる。

俺は思う、富木はせまく深いな。

ちなみに俺は広く深い。

「富木は誰が好きだ？」

「アタシは、ヤミーが好き。」

ヤミーはシンデレキキャラとして出てきているが出番が多いことは言えない。

「そりか、俺はミルギとか好きかな。」

「ああミルギもいいかも」

ミルギはおつとりしたキャラでデジタルと書いたままであるキャラだ

「所で、今なに見てたんだ？」

俺が画面を指さし聞くと

「今第2期の5話を見てたところ、」

「何通り見た？」

「20通り位かな。」

ちょっと偉そうに言うが、俺の方が上だな  
全アニメ最低でも25通りは見る・・・・が

「凄い見たな、」

「でしょ？アタシはソレほど愛が深いのよ。」

と言つかなんで25回も見れるか、疑問に思つ人もいるでしょうから説明。

授業中に顔を伏せているのは寝てのではなく、アニメを見てるから  
ちなみに、イヤーフォンを付けているが、髪が長くて耳が隠れてい  
るのでばれない。

「最新のフィギュア買つた？」

「勿論、買つた。」

「じゃあじゃあ・・・キャラソンCDは？」

次々と質問していく富木。

富木と話しているとドンドン時間が過ぎて行く。  
『ペペペペペペ・・・』と突然俺の時計が鳴る。

時間を見ると19時になっていた。

この時間はいつもアニメを見ている。

「もうこんな時間か・・・そんじや、そりそろ帰るわ

「ええ？もう帰っちゃうん？」

何か寂しそうに呟つ富木、だが俺は気にせずドアノブに手をかける。  
・・が

鍵、解除して。

20時。あの後結局出る事が出来ずに  
俺は富木の話に付き合わされた・・・が

「明日学校で話そう」と言つたら帰してくれた  
家に帰り最新話のアニメ（何回も同じ回）を見る

そして翌日　土曜日。

カレンダーを見た俺はやつてしまつた感があった。

そして月曜日。いつもあいている席には富木の姿があつた。

「なんで土曜日来なかつたん！？」

教室に入ると怒鳴られる俺。相手はモチロン富木  
はあと溜め息をつき、俺の席に着く

「昨日は学校休みだろ？」

「でも明日学校で話そうって！」

怒っているようだが彼女の表情は金曜日に始めてあつた時とは違つ  
て明るかつた。その笑顔が俺にはまぶしすぎた

「良いだろ、学校なかつたんだから。」

「嘘つきーヤスのバーカ。」

?ヤスのバーカ? そう笑顔で言つた富木だが、これを無表情で聞い  
たこのがあるような気がした。そう遠くない過去、数か月前位だつ  
たか・・・確かにあれは・・・いつどこで聞いたんだ? 思い出せそう

で思い出せない。いやきこてないような気がしてきた。読んだ・・・

?そんなの読む訳が・・・

俺の脳裏をよぎる記憶・・・

もじ町木が居なかつたら俺はまだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0364z/>

---

二次元野郎と・・・

2011年12月1日14時12分発行